

<前回：自然主義の二つのタイプ>

0. 17世紀のイギリスの状況 → 近代社会の母体

科学革命の世紀＝近代科学誕生の世紀。政治的また経済的な混乱の世紀。

(1) 科学革命と政治・キリスト教、ニュートン主義の自然神学

2. マートン・テーゼ：キリスト教（とくにプロテスタント・ピューリタニズム）は近代科学の形成に積極的かつ実質的な寄与を行った。王立協会の初期のメンバーの多くはピューリタンの信仰の持ち主であった。

3. 穏健な王制・国教会体制を擁護するという機能を有するいわばイデオロギーとしての科学。ニュートンとニュートン主義者は、最新の科学的知見（新科学）によって、無神論的思想傾向を含む論敵（右と左の）たちを合理的に論駁することを目指した。

4. 17世紀までの多くの科学者にとって、自然探究は、神の創造の偉大さを讃美すること（＝宗教的業）であり、ニュートン科学は、無神論論駁という意図と結びついていた。

(2) 18世紀と聖俗革命、啓蒙主義の帰結

8. 西洋の「宗教と科学」関係論は、18世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解は、この変動に規定されている。

村上陽一郎の「聖俗革命」：「神—世界—人間」→「世界—人間」

9. 「近代科学」の自律化：一つの自律的な活動としての近代科学の自立。→啓蒙的知、啓蒙的な科学理念（実証科学としての自然科学）の誕生。

諸科学・諸学問のモデル＝近代的知のモデル。

↓

自然主義

10. 代表例としてのラプラス

12. 宗教の私事化：宗教改革以降の教派的多元性の状況下での教派間対立→「政教分離」システムと信教の自由（宗教的寛容）

→公共の領域を私的な事柄（宗教、道徳、経済）の対立から切り離す。宗教を私的なものとして位置付けられる（私事化）。

14. 歴史主義と自然主義：近代的知における知識あるいは思考・思惟のあり方に大きな変化→自然法的な超歴史的思惟、あるいは伝統的キリスト教の超自然主義からの離脱。

・思惟の歴史化（思惟の歴史性の自覚）

自然法的な超歴史的思惟 → 歴史主義

・超自然主義批判としての自然主義

超自然主義 → 自然主義

15. 「自然主義と歴史主義とは、近代世界の二つの巨大な科学的創造であり、この意味においてそれらは、古代にも中世も知られていなかったものであった。」

「自然主義」は、あらゆる質的なことや直接的経験を度外視する法則的な連関として、また、そのようなものとして現実総体を包括する連関として理解されねばならない。それは、数学的に最大限表現可能な量的関係法則の体系を一般的意識による日常経験の下に打ち立てることであり、純然たる空間の本質から由来する数学的定式によって、さまざまな感覚的経験像とそれらの相互連関とを表することで或る。かくしてそれは、人間精神がかつて到達したうちでもっとも大いなる、偶然や視覚的外観からの解放であり、最も膨大な広がりとし明晰さをもつものであり、あらゆる技術の最も驚くべき土台である。」「哲学的な出発

点や統一感覚から完全に解放され、純然たる実証科学としてあらゆる精神的エネルギーと注目とを吸収し尽すにいたった。」(トレルチ、159)

cf.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』1936年。

(3) 合理性の複数性

進化論論争：現代の科学技術とキリスト教思想(神学)とを学問として相互に関係づける際のモデル・ケース。

16. リチャード・ドーキンス(『神は妄想である—宗教との決別』早川書房)とインテリジェント・デザイン論(ID論=知的設計論)との対比。

18. キリスト教側の原理主義(宗教原理主義)：進化論は科学として間違っており、創造論こそが正しい科学である。

↓

この二つの主張。「科学と宗教」は原理的に対立するという原理主義を採用する点でまったく同じ。進化論が合理的なら創造論は非合理的、あるいは創造論が合理的なら進化論は非合理的なはずであると、つまり、合理性とは一種類(=自分の立場)しか存在しないと考える(合理性の一元論)。

↓

きわめて狭い、そして独善的な合理性理解であり、したがって、より柔軟で広い合理性概念を取り戻すことが、ともすれば泥沼に陥りがちな進化論論争を解決する手がかりとなるのである。

19. ジョン・ヒック『宗教の哲学』(勁草書房、原著初版1963年)。

21. ヒックの提案。この「批判的信頼」の原理を、宗教体験にも適用すること。

科学的、日常的、そして宗教的など、私たちはさまざまなタイプの経験に信頼し、しかも、必要に応じて、それらを批判的に吟味しつつ生きている。これは理に適った、つまり生きる上で合理的な態度である。

22. 合理性の複数性。

世界における人間の経験は、決して一様ではなく、多岐にわたり多様である。経験に批判的に信頼して生きることは、それが自分の経験とは異なっている、「合理的」であると認め合うこと。

↓

無神論原理主義と創造論原理主義の双方に欠けているのは、経験の多様性と合理性の複数性についての感性。それに気づくとき、進化論論争のアポリアを超えて進む道を見出すことができるように思われる。

(4) 二つの自然主義

23. 合理性の複数性 → キリスト教としばしば対立的に捉えられる近代的な自然主義(自然の事柄は自然の内部で説明される)についても再考を促す。

25. ダーウィン自身とダーヴィニズム(とくに、ネオ・ダーヴィニズムあるいはダーヴィニズムの精神)との相違、またダーヴィニズム(とくに、ネオ・ダーヴィニズム)と進化論一般との区別を指摘しつつ、進化論を構成する14の構成要素を抽出。

3. キリスト教思想と心理学 1

(「4. キリスト教思想と心理学 2」11/5。「5. キリスト教思想と心理学 3」は省略)

1. 「脳認知系の研究はすでに宗教を対象にしてなされてきた実証的研究と齟齬するものではないが、宗教についての新しい研究方法の可能性を提示する結果になっている。宗教研究者が独自の領域として設定してきた分野は、どういう意味において独自であったのか。それは他の領域の研究と比べてどのような特別な視点を必要とするかを、新しい視点のもとに考え直すことが求められよう。」(井上順孝「宗教研究は脳科学・認知科学の展開にどう向かいあうか」、宗教哲学学会『宗教哲学研究』35号、二〇一八年、昭和堂)

2. 現代:「生命」とともに、「心」が科学的探究の対象となった時代。「心を科学する」という営みにおいて注目すべき研究分野は脳科学以外にも、実に多岐にわたっている。

今年度後期のこの特殊講義、11月12日以降はこのテーマに集中。

↓

しかし、心を科学する営みは、現代において急に始まった動きではなく、それは19世紀に遡る実証的な心理学、あるいは深層心理学・精神分析学において開始されていた。この19世紀の流れから、宗教心理学や牧会心理学・牧会カウンセリングなど、キリスト教との接点が構築されてきたのである。

3. 19世紀からの「心の科学」の前史。現代の実験心理学、認知科学、脳科学と、キリスト教思想との接点として、精神分析学を取り上げる。

(1) 心を科学する時代への道のり

4. 19世紀:近代的学問の研究成果は、キリスト教神学にも無視できないものとなった。その焦点は、歴史研究に基づく聖書学であったが、ちょうど自然科学に加わろうとしていた心理学(19世紀後半から20世紀)も宗教をその研究対象としつつあった。

5. キリスト教思想にとっても、心理学の知見は20世紀後半には積極的な意味が自覚される=牧会心理学や牧会カウンセリングの登場。

6. 魂への配慮(ケア)という考え自体は、キリスト教の初期に遡ることができるが、それが、牧会カウンセリングとして認知されるようになったのは、1920年代以降(「一般カウンセリングの起源とともに古く、米国のA.ボイセンらが1920年代に、牧師養成のためのカウンセリング的臨床訓練を実施した。」「岩波キリスト教辞典」の「カウンセリング」の項目)。

ティリッヒ:アメリカ亡命に先立つフランクフルト大学時代に、フランクフルト学派の思想家の影響で精神分析学に関心をもつ。アメリカでのユングやフロム、そしてカレン・ホーナ、ロロ・メイらとの交流を通して、牧会心理学、牧会カウンセリングに関する神学的論考として結実(1950年代)。

・『ティリッヒ著作集 第六巻 — 懐疑と信仰』(白水社、1979年)

「心理分析と実存主義の神学的意義」「牧会と心理療法」「神学に対する心理療法の影響」

・『宗教と心理学の対話 — 人間精神および健康の神学的意味』(教文館、2009年)

「精神分析、実存主義、神学」「実存主義と心理療法」「神学思想に対する牧会心理学の影響」「神学とカウンセリング」「牧会的ケアの神学」「心理療法とキリスト教的な仁保源本性の解釈」「精神療法は宗教的プロセスであるか?」

↓

・ロロ・メイ著作集(誠信書房)『失われし自我を求めて』『愛と意志』『創造への勇気』

『存在の発見』『自由と運命』

7. パネンベルク：『人間学 — 神学的考察』（教文館）も現代心理学の動向に強い関心を示していた。

8. しかし、この時期までのキリスト教神学において視野に入れられたのは、主に精神分析学や発達心理学の理論である。

（2）精神分析学の問題

A：フロイト

宗教的象徴→心の内的な統合、心の内と外の媒介

夢の象徴：夢判断（解釈）と欲望→意味と力

1. 無意識の発見（？）の意義 cf.デカルト主義
夢と宗教
2. フロイトの近代主義：科学としての心理学
心理現象の因果的見方・遡及的見方（アルケオロジー）
意識は無意識と連続的に、力動的につながっている
病・症状（結果） → 無意識の抑圧（原因）
3. 心のモデル（局所論） → 経済論（力学的エネルギー論）＋解釈学
力と意味

意識／前意識／無意識、自我／エス／超自我
7. 治療のためのモデル化
8. 神経症 → 抑圧理論
抑圧されても消滅しない → 症状：無意識内容の代理形成、置換・圧縮
9. 夢：欲動 → 夢を生み出すエネルギー＝無意識的欲望 → 夢の生産・欲望の充足
検閲：圧縮・置換・形象化・二次的加工
10. エディプス・コンプレックスと性欲モデル
誘惑理論→誘惑は事実ではなく幻想の産物→エディプス・コンプレックス（三角関係）
→文化秩序の形成（欲望の収斂）
11. 神は投影である / 宗教は幻想である（還元主義的解釈学）
・幼児期に形成された父親イメージの自然への投影
・集団的な強迫神経症としての宗教
12. 近代人の宗教からの自立、啓蒙の勧め
↓
宗教的に機能する心理学（カウンセリング）
しかし、カウンセリングは宗教の代わりとなり得るか？
13. 個体発生は系統発生を繰り返す（反復説）→ 心理学と民俗学：トーテミズム
14. フロイトの宗教論の問題点
 - ①科学主義（一種の信仰）→証明されない仮説への依存
 - ②還元主義→想像力の積極的評価の困難さ
 - ③宗教現象の多様性を適切に扱えない
 - ④モデルの不当な一般化（人類学からの批判）
15. モデルか実在か？ 類型の実体論化の危険。

「フロイトやユングの考えはどれもおかしい。最近の新しい知見とは、大きく矛盾する。フロイトやユングが、脳の構造とかはたらきに触れているからなおさらである。ある意味では、脳の構造とはたらきについてのかれらの理解が、その理論を基礎づけているといってもよい。」(坂野、iii)

「かれらのように観念的で類推によるのではなく、脳的な基礎を考慮したものである。したがって人間の脳の構造とそのはたらきを、動物から人間へと進化するにいたる系統発生的な観点から眺めると、動物の意識と人間の意識とは質的に区別されなければならない部分があり、このことを考慮すると意識の反対概念として無意識を持ち出し、動物における無意識の存在を仮定することの問題点がどこにあるかが、理解できるようになるだろう。」(6-7)

「私たちは動物の行動をみて自分の行動との類比から、その動物は意識的に考えて行動しているとか、いや反射的な行動だといったりすることが多い。これが類推による思考である。」「ユングによる類推の産物」(7)

内省と類推という方法論と心の実体化が結び付く。

B: ユング

1. 「個人的無意識」(personal unconscious)と「集合的無意識」(collective unconscious)
2. 患者の夢のイメージと古代の神話のイメージとの有意味な平行関係→ 集合的無意識
3. 心のモデル: 意識・自我/無意識(個人的/集合的) → 自己
4. 集合的無意識の内の元型 → 象徴・イメージ
外的環境との適合のために種に備わった生命エネルギーの形態化のパターン
5. アニマ-アニムス、影、老賢者、太母、ウロボロス、童子、永遠の少年、トリックスターなど: 集合的無意識レベルの諸力の人格化(後期シェリングの神話の哲学)
6. アニマ(男性にとっての女性像) - アニムス(女性にとっての男性像)
7. 太母: 宗教史の母神類型。地母神、女神、神の母、ソフィア → 二重性
8. 母親コンプレックス、「永遠の少年」(puer aeternus)と母殺し
9. 影: 集合的無意識への入り口。抑圧された暗い半面。
10. 「自己実現プロセス」=個性化(individuation) (1)自我の確立 (2)無意識との統合
自我・意識と無意識の領域が統合に、完全な全体としての自己(自己の全体性)が完成して行くプロセス
11. ノイマン: 魂の男性的なものの力が成長して行くプロセスとアニマ像の変容プロセス。
母(保護・自立) → 恋人・妻(性) → 姉(精神) → 娘(超越)
ソフィア、マリア
12. 神話は人間(民族)の意識の成長プロセスの記録である。
神話的元型との精神的な関わりによって、個性化が直面する問題を解決する(→治療)
13. 完全な自己のイメージ、宗教的伝統: キリスト教の三位一体、仏教のマンダラ
14. 三位一体の象徴は、「完全であるが十全ではない」。悪と女性原理の問題
15. 渡辺学『ユングにおける心と体験世界』春秋社、1991年。
「われわれは、コンプレックスと元型という無意識における自律的なものを中心にすえて、ユングの「心の現象学」を分析した。この立場はまた、心的現象の立場とも呼ばれるが、基本的には方法論的独我論に基づいていたことが確認された。方法論的独我論の視点に固

執しないとしても、コンプレックス論と元型論において問題になっていたのは、むしろ世界そのものの構造ではなく、連想の枠組や空想や認識の構造、つまり、広い意味での無意識的構想力であったことは自明であろう。ところが、ユングの後期思想において顕在化する共時性の原理の観念においては、このような立場や視点は止揚され、いわば意味実在論ともいうべき立場への決定的な転回が行なわれる。結局のところ、ここで問題になるのは、人間の心理そのものではなく、むしろ、世界の根本的なあり方であり、それと人間の心との関わりなのである。」(149)

16. 「心」は実体（時間空間的に局所化される物的な存在）か？ 精神分析学における心の局所モデルは、「心」の記述としてどの程度適切か？
有機体的な身体との関係性は？

<参考文献>

1. フロイト『トーテムとタブー』『モーセと一神教』（著作集6、8）日本教文化社。
2. ジェームズ『宗教的経験の諸相（上下）』『純粹経験の哲学』岩波文庫。
3. リクール『フロイトを読む』新曜社。
4. 湯田 豊『宗教とは何か』北樹出版。
5. 島菌進／西平直編『宗教心理の探究』東京大学出版会。
6. 松本滋『宗教心理学』東京大学出版会。
7. 島菌進他編『宗教学文献事典』弘文堂。
8. ユング『ユングの象徴論』思索社、『元型論』『続・元型論』紀伊國屋書店。
『ヨブへの答え』『ユング自伝』『個性化とマンダラ』みすず書房。
9. 湯浅泰雄『ユングとキリスト教』人文書院、『宗教経験と深層心理』名著刊行会。
10. ノイマン『意識の起源史（上下）』紀伊國屋書店。
11. ハイジック『ユングの宗教心理学——神の像をめぐる』春秋社。
12. 渡辺学『ユングにおける心と体験世界』春秋社。
13. ヒルマン『元型的心理学』青土社。
14. 林道義『ユング心理学の方法』みすず書房。
15. 坂野登『意識とはなにか——フロイト=ユング批判』青木書店。
16. 小坂井敏晶『責任という虚構』東京大学出版会。